

【書評】

神奈川大学・浙江大学学術交流十周年記念

『日中文化論集』

望月真澄

本書の出版経緯は神奈川大学人文研究所所長鈴木陽一氏の序文に詳細に述べられている。神奈川大学人文研究所と浙江大学日本文化研究所とが学術交流を初めてから十周年に当たるのを記念しての出版であり、両研究所が信頼できるパートナーとして協力し、日中学術交流において重要な役割を果たし、貢献していくという決意のもとに刊行されたのである。

本書には、具体的個別的さまざまな論考が「多様な角度からのアプローチ」と副題に示すように情熱的に論じられている。

田島佳也氏「輸出海産物がつなぐ十九世紀の北海道と中国福建」では、たかだか（というのはレトリックに過ぎないが）北海道の昆布の如きが、幕府の独占貿易に風穴を開け、一方幕府を倒し、一方中華料理を育てたというのである。

吉川良和氏「明清浙江琴派と日本の江戸琴楽」は、江戸時代の日本儒学内琴楽というコンテクストでは浙江省金華からの渡来僧心越が投じた波紋がいかなる状況をもたらしたかを証明してみせる。中国芸能史に造詣の深い論者にしてはじめて可能な着眼である。

以上は第Ⅰ章、【日中交流史】の中からひとつふたつ拾ってみた。

第Ⅱ章、【日中比較文化】では、笈敏生氏の「天皇に対する拍手，神に対する拍手」が面白い。拍手儀礼は日本列島以外には見られなかったという指摘を、思いもよらぬ陸徳明『經典釈文』から引き寄せてきて日本習俗の特異性として紹介する。8世紀までは神に対すると同じ拍手が天皇に対しても行われていたが、渤海の使者が来たそのときにそれが中止された。それは日本の儀礼の中国化、つまりは当時における機敏な国際化の一環であったと考えられるというのである。本論も一見些細な「拍手」を通して、日中交流史を考察したもので、「交流」の深さ長さを興味深く顕在化させて見せた。

山口徹氏「日本における民具研究の現状と課題」が総論とすれば、香月洋一郎氏「民具を通しての日本・中国の農村の生活文化比較への試み」は具体的に鋤と竹籠の農具を日・中で比較するときに、中国では1種類多用途に向かい、日本では用途別多種類に発展するという両国農具の個性の発見が実地調査を踏まえて考察される。融通無碍の中国老荘思想を想起させる一方、日本人の繊細などという国民性が隠れているのかも知れないが、氏の論はそこまでは言わずこらえているかに見える。

沢田ゆかり氏「高齢化社会に直面するアジア」は、経済状況の激変が5年を待たずして進行し、「21世紀はアジアの世紀」と昨日言っていたものが、今日は高齢化社会をどう克服するかということになるさまを日本・香港の対比で論じる。「日本型経営」が音を立てて崩壊し、いな、一転して成長への障碍となる、このグローバル・スタンダードへの移行が露骨に引き起こす悲劇？家事・育児・介護など家庭が背負ってきたものにも大打撃を与えている。「自由放任＝無政府」状況だったきのうの香港は、きょうの日本の産業空洞化を予告していたのであり、いつの

間にかわれわれの身の回りで働いてくれている人たちは契約社員に取って代わり、年金も医療保険制度も安穩の内にはない。本論文は、既に解決不能な深刻な警告、悪夢を手取るように示してくれた。

沢田論文の実学的論述に立ち向かうのは、孫悟空、いや、鈴木陽一氏の「猪八戒はなぜ三星をからかったか？」である。本論文は、記号学的方法をもって『西遊記』第26回、いわゆる「人参果ものがたり」を読み解くものである。中国における年画と小説とが共通の文化的母胎から生み出された「期待の地平」の産物であるとし、昇官・発財・長寿など中国人の大好きな年画などに見られる吉祥物が中国人の発想のコンテクストであり、そのコードによって解読されることを物の見事に分析実験して見せた。論題も面白いが、解読方法が痛快なのである。このコードの中で、漢字の一語一音一字一義特性が、もうひとつの触媒のように作用する猪八戒の地口のコノテーションとなって噴き出し、これが中国人をしてたまらなく嬉しくさせるというわけである。

第Ⅲ章【西洋近代文化の受容】では、伊坂青司氏「日本におけるヨーロッパ文化受容の問題点」が、本書の後序として機能しているようである。曰く、近代アジアはヨーロッパをモデルに民主主義の実現と科学技術の発展を目指して後進国からの脱皮を模索したが、それに伴う、アジアの共同体の喪失・自然破壊などのしっぺ返しも被ったというのである。

日本は明治以降国家主導で、財閥の形成、その結果の特権階級対農民・労働者の対立、階級格差が生じた。その矛盾を「八紘一宇」の軍事侵略で隠蔽しようとした。日本の哲学・文学はいずれもこれに抵抗することができなかつたとの反省を述べ、戦後はまたアメリカに顔を向けたまま、資本主義構造は一層深刻化したとし、これからの日本社会では、個人の自立と他者との関係が必要であることを強調する。また東洋的自然観を理論化していくことも重要な今日的課題であると説き、「交流」とは世界文化を異文化対立として固定して理解することなく相互方向のものでなければならないとする。

本書は、日・中を主軸に交流の具体的ありさま、歴史、あるべき姿を全論文が問題提起しているのであるが、これは単に日・中だけの問題でなく、今後、全人類的視野に立って、その一員たるものが深く考えるべき今日的ヒントに満ち満ちている好著と言える。(神奈川大学外国学部教授もちづき ますみ)